

昭和30年代まで蜜柑栽培と稲作を主とした田園の町、長与町。その当時、人口は1万人程で水道と言えば丸田社宅（現丸田アパート）の私設の専用水道があった程度でした。

夏期は温水に見舞われ、また水質的にも鉄分が多く、住民からも公的な水道施設の要望が高まり、幾多の曲折を経て、昭和33年簡易水道の認可を受け、昭和35年10月完成、給水を開始しました。内容としては、当所計画給水人口は3,100人であったが、予想外に給水人口が増え4,600人に事業の変更認可を受け、また施設の拡充を図ることとなった。工事内容は、第1浄水場、第1配水池（250m<sup>3</sup>）、送水管φ100、335m、配水管φ150、260m等であった。

水源は、浅井戸に、長与川の伏流水を取水し、第1浄水場でろ過した後第1配水池に送水し、配水するというフローであった。その当時の給水区域は内園、長与駅前、丸田社宅、毛屋、岡社宅、皿山、定林地区であった。

給水開始より1年後、未設置地区より再三の要望があり、第1期拡張事業を行い、区域を下高田、前田川内、嬉里谷、西高田、三根、下平水場地区へと拡大し計画給水人口5,900人とし完成しました。

その後、高度成長時代に突入し、生活水準の向上、また、都市化も進み、水道もそれらに対応すべく施設の拡充にせまられ、第2期拡張事業を昭和42年度より計画し、第2配水池（460m<sup>3</sup>）を築造し、昭和43年度に完成しました。役場に水道課が設置されたのも42年からで、水道に取り組む体制が整いました。また40年代前半は“長崎サク”と言われる大かんばつがおおい、長与川の河川水の争奪が農業耕作者と水道との間でくり返されたそうです。しかし、当時の水道担当者の苦労のかけり制限給水をする事なく乗り切ることができ、水道に対する住民の認識も高まり、信頼も得ることができたようです。



昭和46年人口増に対応する為、第3期拡張事業を計画し新たに東高田公営住宅と周辺地区、西高田地区を給水区域に加え、計画給水人口13,000人で翌年47年に完成しました。

さらにそのころより大型団地開発があいつぎ、区画整理事業等により都市化が急速に進み、それに伴って水需要も増大し、ひきつづき第4期拡張事業に着手しました。第1浄水場の増設、第3配水池の築造等施設の拡張、整備を行い、昭和50年に完成しました。

その後も人口は増えつづけ、さらに長与川の有機物汚染の進行に伴い、水量、水質とも不安定な需給体制になり、水を作っても配水量が多く、追いつかない危機的状況を迎えていました。そこで大規模な施設の拡充が必要となり昭和60年、第5期拡張事業を計画し、抜本的な解決策として新規水源の開発、第2浄水場の新設、第5配水池、減圧水槽の築造、第1浄水場には、高度浄水処理施設（生物接触酸化槽）を導入し、昭和63年に完成しました。

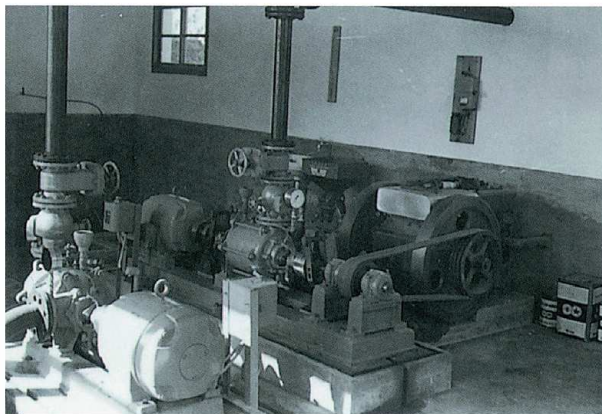
平成元年より第2浄水場が本格的稼働し、ようやく安定して給水出来るようになり、水道事業の基盤も整備されました。

その後平成5年に第6期拡張事業では、給水区域の拡張を図り、新たにサニータウン団地、緑ヶ丘団地に給水を開始しました。

平成8年より、第7期拡張事業に着手し、東高田浄水場、東高田2号配水池の新設を行い、まなび野、高田南区画整理地区等への給水区域の拡張を行い現在に至っている。

平成23年度現在給水人口は、38,836人、1日最大給水量12,075 m<sup>3</sup>で、日夜、清浄、豊富、低廉な水の供給に努めています。

## 水道のあゆみ



昭和36年当時第1浄水場内第1配水池用送水ポンプ